

# 「歴史地図」から考える近世から近代の関東地方

神奈川県立元石川高等学校 長島一浩

## 地図を利用する日本史の授業

この授業案は学習指導要領解説『日本史B』の1「科目の性格と目標」、および、2「内容とその取扱い」における記載に合致するものである。とくに、3「指導計画の作成と指導上の配慮事項」の(1)「国際環境や地理的条件との関連について」に、「我が国の歴史と文化を地理的条件と関連付けて多面的・多角的に考察させる」とあるのも授業の設定の理由である。

## 「歴史地図」から考える近世から近代の関東地方

ここでは「近世から近代の関東地方」をテーマとする授業を例として考えてみたい。具体的には、『地歴高等地図』p.109～110「政治・文化の中心地となった関東地方」、p.111～112「江戸とその周辺の発展」、p.113～114「江戸から東京への移り変わり(1)」を教材として取りあげる。授業テーマとしては、(1)政治・文化の中心地となった関東地方、(2)江戸とその周辺の発展、を設定し、課題の考察より近世・近代の関東地方を考えることにした。授業展開は、(1)については、「幕藩体制の確立」、すなわち近世の織豊・徳川政権確立の過程の「江戸幕府の成立」を学ぶ単元の一部として実施し、(2)については、「幕藩体制の展開」のなかの「経済の発展」の「三都の発展」、単元の一部として実施する。

## 授業例「歴史地図」から考える近世から近代の関東地方

『地歴高等地図』p.109～110「政治・文化の中心地となった関東地方」、p.111～112「江戸とその周辺の発展」、p.113～114「江戸から東京への移り変わり(1)」をよく参照し、以下の課題を解答しなさい。

### ■ 課題(1) 「政治・文化の中心地となった関東地方」 関東地方の変遷と江戸

源頼朝の鎌倉幕府は京洛の天皇・貴族政権に対する篡奪の政権であり、鎌倉開府は武家政権として

の「天下草創」であった。幕府を主宰した執権・北条氏の名跡を継いだ戦国大名・後北条氏は、戦国期・東日本随一の都市であった相模・小田原を拠点とし、関東の覇者として「関八州国家」=東国国家の継承・経営者となる。そして、後北条氏が豊臣秀吉の天下統一に抗して降伏したあと、豊臣政権の五大老筆頭となる徳川家康が秀吉の意向で関東に移封されたのは周知である。秀吉の統一とは史上これまでにない強力な統一政権の成立であり、日本列島の東西の差異は表面的にはすみやかな解消に向かう。この統一政権は、関東に入封して東国国家を継承した徳川家康が秀吉死後の天下分け目の関ヶ原合戦に勝利し、さらに大坂の役に勝利することにより完成し、史上初めて東国・関東より日本列島を完全に支配する政権となるのである。

指導のポイントとして、「作業1」については、利根川の西側一帯の後北条氏の領国形成に注意する。これは当時の利根川水系中流域が、奥羽・蝦夷地域の最南端の境界であったことによる。地形的に西南日本と東北日本が利根川をはさんで「逆くの字」の形で接続し、それが古代・中世を通じての西国(京都政権)と東国の一つの境界である。また、同水系中流域は、奥羽・北関東の鉱物・穀物などの重要資源の集散地であり、江戸湊はその中心であった。ただし、後北条の支配は、当時の関東の中心が鎌倉や江戸でなくその拠点・小田原にあったことを意味する。利根川の船運は当時の東京湾・江戸にとどまることなく小田原から西国へ流れた。これが家康入植前の、“寒村”・江戸の姿であった。

**作業1** p.110②「関東地方の変遷」④をみて、白地図に関東のおおよその範囲を示し、16世紀の戦国大名の勢力範囲を記せ。

「作業2」は、周知のように関東がほぼ幕領と譜代・親藩の領地となっている点に注意する。授業では当時の大名分布図で、「親藩・譜代・外様」それぞれの所領状況を俯瞰・分析する際に利用したい。ちなみ

に上野・沼田は、現在の大河ドラマで話題の戦国大名・真田家の所領である。真田が外様にも関わらず関東の旧領を確保できたのは、嫡男・信之が徳川譜代最重臣の本多忠勝と縁組をして徳川方に属したゆえんである。TVドラマや映画などの話題は親しみやすく、生徒の興味を引きインパクトを与えやすい。史実の検証は必要だが授業の余談はもとより、ときには導入としても有効である。

**作業2** p.110②同⑥をみて、白地図に17世紀関東の「幕領」・「譜代・親藩」・「外様」のそれぞれの所領範囲を記せ。

## ■ 課題(2) 「江戸とその周辺の発展」

### 近世の江戸とその発展

都市・江戸それ自体は史上非常にポピュラーな存在であるが、通史・教科書的には詳細に扱われているとは言いがたい。研究成果をふまえ、その史的意義はできるだけ取りあげたい。戦国後期にやや衰退した江戸湊だが、「鎌倉四か所」の大寺院・円覚寺の寺領・江戸前島が存在し、後北条氏や秀吉から安堵状などを得て独自の存在を示していた。近世江戸の起こりは、天正18(1590)年の家康の江戸入りとされるが、本格的には、家康がこの江戸前島を奪取したあと、江戸初期の「天下普請」の時代まで待たねばならない。中世より伊勢湾から関東への海上交通路が常時流通しており、その拠点の一つが江戸湊であるが、江戸の発展はその地理的特質、近世の大規模かつ広域的な流通経済に耐えうる地理的条件、すなわち至便な水運環境を最大の理由とした。この点は江戸期の利根川のいわゆる「瀬替え」、河口の下総・銚子への東遷作業と同様、目的は「治水」ではなく「水運(船運)」であった。瀬替えは家康の関東領国の利根川右岸への組み込みであり、その重点は利根川・鬼怒川の両水系の一体化による関東平野水運の利便性向上であった。のちの日光東照宮造営・修繕も、この水運の向上と関連する。いわゆる「大江戸」の成立は、関ヶ原後の徳川の覇権確立より天下普請まで、結果的に家康から家綱の時代まで約70年間にわたる大建設によるが、必要に応じた意図的・継続的な実施で、臨海低地・海上に上・下水道などのインフラを備えた埋め立て都市を建設した史上初の例とな

る。自然条件の湊に、人工的な掘削・埋め立てや運河・船入堀などの建設を加えて、「近世的な湊」にリニューアルした。

「作業3」ではこうした近世・江戸の地形・自然状況について、作業を通じて考察する。江戸工事の開始として、江戸前島の半島状付根を開削してつくった運河の「道三堀」は、江戸城下より小名木川・新川の利根川河口域の沿海運河を通り、当時東国最大の塩産地の下総・行徳をつなぐものであった。この沿海運河は世界史的にも早期のものとする。慶長9(1604)年に始まる天下普請(1次)の江戸城増築の結果、日比谷入江埋め立ても行われた。かかる土地改良の政治・経済上の重要な意義を気づかせたい。

**作業3** p.113③「徳川家康が入った頃の江戸と土地改良(概念図)」をみて、昔の海岸線を書き入れた白地図に「江戸前島」、「日比谷入江」、「溜池」、「千鳥ヶ淵」の位置、および現在の海岸線を書き込んでみよう。

「作業4」では、やがて巨大都市・江戸となるための前提要件を考察する。臨海の低地である江戸は、当初より飲料水の自給自足不能という都市としての致命的欠陥を有していた。後北条時代の軍事・都市的未発達もそれに原因する。水確保は最重要課題であり、それがまず「千鳥ヶ淵」などの造営で、最初の水道・神田上水は潮干満の境目の現文京区・関口より取水された。「淵」は上流からの流水をせき止め、「池」は海からの潮の影響を止めるダム役割をもった。当時なされた工法、土地の高低・潮汐の動きなどを総じて判断し、傾斜・勾配という自然条件を生かしたたくみな都市計画についても考えさせたい。

**作業4** p.113③および、①「江戸」・④「江戸の上水の整備(概念図)」をみて、なぜこのように多くの「淵」・「池」や「上水」などの整備がなされたのか考えてみよう。

### 【参考文献】

鈴木理生『江戸はこうして造られた』(ちくま学芸文庫、2000年)など